に眞文伊勢物語には、聞をかぐと訓せたり、又舊本今昔物語、平の實文が事をいふ處、鼻にあて、聞けば、艶ず馥しき黑方の香にてあり云々などみゆるも、聞はかげばとよむべし、それよりして口語には、目のきく、手のきく、口きくなど、すべて一身に就ていはざる處なく廣く用ひたり、

香初見

〔日本書紀二十推古〕三年四月、沈水漂著於淡路島、其大一圍、島人不知沈水、以交薪燒於竈、其烟氣遠薫、則異以獻之、

〔聖德太子傳曆上〕推古天皇三年三月、土佐南海夜有大光、亦有聲如雷、經卅箇日矣、四月、著淡路島南岸、島人不知沈水、以交薪燒於竈、太子遣使令獻、其大一圍、長八尺、其香異薫、太子觀而大悅、奏曰、是爲沈水香者也、此木名旃檀、香木生南天竺國南海岸、夏月諸蛇相繞、此木冷故也、人以矢射、冬月蛇蟄、卽斫而採之、其實雞舌、其花丁子、其脂薫陸、沈水久者爲沈水香、不久者爲淺香、而今陛下、興隆釋教、肇造佛像、故釋梵感德、漂送此木、〇略下

香種類

〔倭名類聚抄十二香名〕香　樓炭經曰、凡雜香有四十二種、

〔箋注倭名類聚抄六薫香具〕樓炭經六卷、晉法立共法炬譯、所引文、原書無載、按、十二遊經、有雜香四十三種之文、恐源君誤引、下總本作四十三種、伊呂波字類抄同、與十二遊經合似是、

〔本草和名十二木〕沈香一名堅黑、一名黑沈、已上二名、出兼名苑、沈香節堅沈水者也、一名蜜香、一名棧香、不沈不浮、與水平者、一名槀香、已上虛白者、出疏、薫陸香一名膠香、一名白乳、已上二名、出兼名苑、一名雲華沈油、出丹藥口訣、一名乳頭香、出鹽眞方、鷄舌香一名亭尖獨生、出丹口訣、藿香、詹糖香、楊玄操、音上之廉反、下音唐、楓香、陶景注、此六種皆合香要用也、波律香、楊玄操、音婆、注云、出婆律國、故名之、白檀、已上二種出陶景注、沈香、青桂、鷄骨、馬蹄、牋香、同是樹也、丁香、又一種也、

〔大安寺伽藍緣起流記資財帳〕合麝香壹齊又壹筒重二兩二分、並佛物、

合白檀貳斤捌兩參分佛物

合沈香伍拾玖斤壹拾伍兩佛物五十九斤九兩、法物六兩、